

王暉とその交遊關係について

小塚 由博

はじめに

1. 王暉とその作品について

2. 王暉の家族について

3. 交遊關係(1)——杭州近邊——

4. 交遊關係(2)——江南およびその周邊——

おわりに

はじめに

筆者はこれまで明末清初の江南における文人の交遊ネットワークの實態解明のため調査研究を進めてきた。とりわけ近年來は清初に揚州を據點として活動していた文人張潮(一六五〇—一七〇九?字は山來、號は心齋居士。安徽歙縣の人)の交遊關係を中心にして論じてきた¹⁾。彼は當時の文人たちの小品文(短編の小説や雜記など)を集めた3種類の叢

書（『虞初新志』『檀几叢書』『昭代叢書』）を編纂したことで知られ、その際各地の大勢の文人たちがその作品収集や校訂等編集作業に關與していた。當時このような共同で一つの叢書や總集を編纂することは珍しくなかったが、いずれにせよその作業には中心となるべき編者の人脈に大きな影響を受けた。張潮は、自らのつてを頼りに各地の文人たちと渡りを付けていたが、その内の一人が本論で取り上げる杭州の文人王暉である。

王暉は杭州仁和縣の出身で、仕官はしなかったが、學問があり人柄も良く、杭州を訪れる者は誰しも王暉との會見を望むほどの名聲を有していた。そのため、彼の交遊關係は幅廣く多數に及んでおり、彼の各作品集を概観しただけでも700名以上の人物が登場する。本稿では今後の調査研究の一段階として、王暉の人物と作品の概要について述べた上で、その交遊關係について大掴みに見てみたいと思う。

1. 王暉とその作品について

①王暉について

王暉（一六三六—？）初名は斐。字は丹麓、號は木菴（字とも）・松溪子。また松溪主人と稱す。浙江仁和（杭州）の人。明の世に諸生となったが、清の世になると大病に罹り、科擧を斷念する。以後、作品制作に力を注ぎ、『遂生集』（二六六〇年。未傳？）十二卷、『今世說』（二六八三年）八卷、『霞舉堂集』（刊行は一七〇〇年以降？）三十五卷などを制作した。晩年には張潮とともに『檀几叢書』を編纂した。一方で杭州を中心に幅廣い交遊關係を有し、友人たちから寄せられた詩・詞・文章を集めた『蘭言集』を編纂した。當時の名流たちとも幅廣く交遊し、地元杭州周邊の文人に止まらず、江南各地の著名な文人達とも關係を有した。彼の諸々の作品中に登場する文人は、詳細不明な人物も含めて

およそ700名以上にも及ぶ。例えば、施閏章・姜宸英・黃周星・周亮工・宋琬・吳綺・余懷・杜濬・范驥・紀映鐘・查繼佐・歸莊・魏禧・毛奇齡・毛際可・毛先舒・梅文鼎・徐士俊・吳儀一・方象瑛・宋曹・王士祿・洪昇・姜希轍・惲格・曹爾堪・宋犖・尤侗・張潮・陸次雲・愛新覺羅博爾都・汪楫・張英・查慎行・黃宗羲など枚擧にいとまがない。

まずは王暉の半生や人となり、また學問等について見ておこう。それについては同郷の文人吳儀一（字は舒晃）が制作した「本傳」^③に詳しい記述がある。

王丹麓、名は暉、錢塘城北里の人である。…十三歳にして縣學に補せられ、名聲が遍く廣まった。癸卯の歲へ康熙二「一六六三」年、二十八歳の時に喉の病を得て死に瀕し、醫者は「學業に苦しんだ結果である」と言った。父は（王暉に）擧子の業を棄てさせて、三年にしてやっと落ち着いた。初め丹麓は仙林橋（不詳）を過ぎた時、一道士に出逢い、こう言われた。「あなたはすでに三度災いに會っており、まだ四難が残っている。これを過ぎればきつと大いに名聲を擧げることであろう。残念なのは富貴にはならないことだ」と。ここに至って果たして現實となった。丹麓はすでに學術の世界を謝絶して門を閉ざし、所藏していた經・史・子・集數萬卷を霞學堂に集めて縦觀した。およそ一書を読むと、必ず首尾胸中に刻みつけてやっと本を手から放し、得るものが有ればすぐに信紙に書き附けた。問遺・贈答・詩詞・尺牘に及ぶまで、片言隻字つぶさに元本があった。その論者は事理併せ持ち、大小すべて擧げられており、終始一貫織りなして一家言をなさないものはなかった。學者たちはこれを慨嘆して、一篇書かれるごとにすぐに買い求め、競って書き寫して海内に流傳することとなった。住まいは北郭の江漲橋で、舟や車の往來の要衝であった。賢士大夫で武林（杭州）に立ち寄る者は、必ず先ずその廬を訪ね、學問を請い交遊を結び、車を停めて去るに忍びなかった。いつも己を律して人に謙り、その飾り氣のない様子は山中の人のようであった。衆人の中にも先に一言も語らず、名士の讌集では、もとより未だ嘗て參加していないことは無かったが、

ずつと謙遜して〈目立たないため〉、〈周囲の者が〉その場にすることに気がつかないほどであった。父に仕えることと謹嚴で、事が無くても必ず左右に侍り、幼年から壯年に至るまで、一晩も外泊することはなかった。^④

一部誇張などもあるだろうが、おおよそ王暉の人となりが見える記述である。王暉が落ち着いて學問に取り組み、更に廣く交遊關係を結ぶのは、どうやらこの大病の後のことであつたと思われる。王暉は後述の通り詩・詞・文章いづれも多數の作品を遺しているが、筆記・雜記の類も多い。また、叢書の編纂にも盡力し、『文津』（未詳）、『檀几叢書』^⑤などがある。特に揚州の文人張潮と共編した『檀几叢書』には、自らの友人の作品も多數收められており、王暉の編纂者としての一面を垣間見ることが出来る一方、その交遊關係の廣さも窺うことができる。「本傳」にはまた、友人たちから毎年多數の作品が寄せられ、その量は千卷にも及び、刊行したことも記されている。^⑥

また、王暉は少なくとも父の存命中は殆ど遠出をしたことも無かつたようであり、王暉と文人たちとの交遊の主な舞臺は基本的に杭州近邊で行われたと推測できる。つまり、言い換えれば王暉が友人の所へ出向くよりも、友人の方が王暉の家を來訪することが多かつたとも言える。また、王暉はその人柄が溫和で控えめであり、それが友人たちとの交遊にも影響を與えていたと思われる。更に「本傳」では、

これに先んじて戊午（康熙十七（一六七八）年）の春に天子が詔して天下の博學隱逸の士をお召しになり、京師の貴人で丹麓を辟召したいと願う者が多かつたが、その意思を奪うことができないのを知って、みなともに大きくため息をついて諦めた。^⑦

とある通り、その學問は杭州に留まらず、廣く評價されていたことも窺える。

以上のように、王暉は仕官せず一生野に在って學問に勵み、多數の詩詞文章を制作する一方、その高い人望から多數の文人たちがその居を訪ね、また作品が盛んに應酬された。それが以下に述べる幾つもの作品集が編纂され世に遺され

た要因にもなっている。それでは、以下王暉の作品群を見てみよう。

②王暉の作品

ア、『霞學堂全集定本』三十五卷

徐倬（蘋村）の序、毛奇齡（大可）・洪若臯（虞鄰）・方象瑛（渭仁）・張彥之（洩侯）の原序、吳儀一（舒鳧）の本傳（前掲）がある。更に多くの文人の引言・評林が附されている。息子王言および娘婿の徐士鏞校閲。霞學堂刊本。内閣文庫藏。

凡例に、「先生の詩文としては先に『霞學堂集』『墻東雜鈔』の二刻があったが、その板本はともに家塾に所藏しており、四方の古を好み學問に努める諸君子たちが書店に至るごとに買い求めようとしても叶わず、甚だ失望していた。今本坊はとりわけ先生に前後兩集を合わせて一卷とし、定本を作り、各地に廣めて同好の士に公開するよう請われた」とある。なお凡例に「書林板秀堂謹識」とあり版元と思われるが、詳細不明。また王暉の自題に「年已七十矣」とあり、康熙四十六（一七〇七）年に制作されたものであろうか。

なお、全集は以下のように分かれている。

- ① 『霞學堂文集定本』（以下『文集』と稱す）十九卷（全196題）引言・評林あり。文體別に分類されている。
- ② 『霞學堂詩集定本』（以下『詩集』と稱す）十卷（全549題）評林あり。詩體別。
- ③ 『霞學堂詞集定本』（以下『詞集』と稱す）三卷（全186題）評林あり。上・中・下卷。詞牌別。
- ④ 『霞學堂尺牘定本』（以下『尺牘』と稱す）三卷（全128題）評林あり。上・中・下卷。

各集には文人たちの評語を集めた評林があり、杭州の文人を中心に多數の人物が並んでいる。その具體的な人物につ

いては以下の表の如くである。

	評者
文集	吳儀一（6ヶ所）・唐之鳳・毛際可・張潮（2ヶ所）・孫琮・汪文柏・姚炳・蔡方炳・徐鈺・宋旣庭・林雲銘・徐瑤・褚人穫・嵇宗孟・曹溶・沈珩・錢肅澗・柳葵・張奕光・魏禧・陸墀
詩集	顧貞觀・沈謙・張綱孫・毛先舒・徐增・吳儀一（2ヶ所）・毛奇齡・顧有孝（2ヶ所）・方漕仁・魏憲・徐階鳳・孫治・施閏章・林雲銘・毛際可・周啓嵩・洪若皋・尤侗・吳農祥・嵇宗孟・徐士俊・錢肅澗・蔣景祁・姜希轍・沈豐垣・徐崧・王嗣槐・柴世堂・劉旭・魏麟徵
詞集	施閏章・毛先舒・吳儀一・方炳・李天馥・曹爾堪・吳綺・丁澎・卓回・毛綺齡・董俞
尺牘	陳玉璣・牛奐・曹溶・汪文柏・吳時森・戴熙

イ、『今世説』八卷

康熙癸亥（二二二—二六八三）年自序。毛際可・嚴允肇・馮景・徐階鳳・丁澎の序有り。評林有り。劉義慶の『世説新語』の體裁に倣い、人物のエピソードを内容別（德行・言語・文學など）に分類して記したものの。その各項目の文章は、他の書物や友人・知人たちより傳えられたものもあるようである。全431項目。ただし、『世説新語』と大きく異なるのは、王暉が實際に交遊した同時代の人物が多いこと、いわば王暉の交遊録ともいえる。

評林には、洪圖光・林雲銘・顧豹文・薛依南・張綱孫・葉闇・毛先舒・吳農祥・黃百家・丁濬・鄭郊・周禹舌・王溶の名が見られる。

『今世説』例言に「汪太史舟次」「汪楫」、林使君西仲「林雲銘」、毛大令會侯「毛際可」、朱處士若始「朱溶」が、ひとたびこの書を見て、ついに相欣賞した¹⁰⁾とあり、また「丁儀部藥園」「丁澎」、孫子宇臺「孫治」、張子祖望「張綱孫」、毛子稚黃「毛先舒」、陸子蕙思「陸進」、諸子虎男「諸匡鼎」が、おのおの机上に新書を出し、慨然として借りて記録した¹¹⁾などあり、多くの文人たちによって讀まれ、評價されていたことが分かる。

作品中に王暉自身や父王湛の事跡があることについては、例言の最後に、

この書は同人たちと互いに參訂して制作しており、集中に載せた先君の行跡一條は、どちらも同人が志傳より載入したもので、名字稱謂はひとえに本文によつたもので、私が敢えて「臨文不諱（文に臨んで諱まず。『禮記』曲禮）」の意味を附したわけではない。私の平生については、もとより記録するには値しないが、先に四方の諸先生からお言葉をたまわつたが、〈その文章は〉頗る稱贊され推薦されることが多く、同人たちがそこで節略して一、二の話を取り入れ、強いて集中に列した。まことに汗顔の至りである。¹²⁾

と記している。いずれにせよ、同人たちの影響が色濃く見られる作品といえる。

ウ. 『雜著十種』

本衝藏版。上・下二冊。内閣文庫藏。その名の通り王暉の十種の雜著「龍經」「孤子唸」「松溪子」「連珠」「寓言」「看花述異記」「行役日記」「快悅續紀」「禽言」「北墅竹枝詞」を収める。特筆すべきは、各作品に以下の表の如く様々な文人たちによって序文・引言・題詞・評語等が多数附されていることである。

	序文・引言・題詞・校閲など	評者
①龍經	毛際可〔總序〕、趙昕〔序〕、胡貞開〔引〕	嵇宗孟・徐士俊〔總評〕
②孤子吟	張綱孫〔序・較〕、范驥・毛際可〔閱〕	孫默・毛際可・張綱孫・范驥・陳廷會・方象瑛・毛先舒・陳玉璣・卓人臯・吳任臣・曹溶〔評〕、尤侗〔總評〕
③松溪子	方象瑛・陳廷會〔序〕、吳之紀・方象瑛〔選〕、陳廷會〔定〕	應撫謙・吳之紀・張綱孫・方象瑛・韋人鳳・周啓嵩・顧有孝・陳廷會・徐嗜鳳・魏禧・孫治・練貞吉・徐士俊・吳兆寬・毛奇齡・沈璿・尤侗・王嗣槐・陳玉璣・毛際可・錢肅潤・張振孫・陸子容・徐崧・陸進・杜濬・方炳・卓人臯・周箕・汪文楨〔評〕
④連珠	宋實穎・蔡紹炳〔題詞〕、方炳〔選〕、柴紹炳〔定〕	魏禧・方與三・周燦・張綱孫・鄧旭・歸元功・趙衍・嵇宗孟・龔仲震・徐之瑞・嚴允肇・蔣平階・孫默・王嗣槐・徐嗜鳳・方炳・沈麟・吳雯清・張振孫・徐士俊・張元時・鄭元闇・馬駿・趙辰六・楊履吉・嵇留仙・方膏茂・陸進・諸匡鼎・毛萬齡・紀映鐘・陸子容〔評〕、顧自俊・徐汾〔總評〕
⑤寓言	蔣籙〔引〕、錢肅潤・蔣籙〔閱〕、顧理美・王鼎〔較〕、姜宸英〔跋〕	魏禧・吳任臣・顧理美・錢肅潤・宋實穎・范驥・蔣籙・陳玉璣・陸嘉淑・任繩隗〔評〕

<p>⑥看花述異記</p>	<p>練貞吉・諸九鼎〔序〕、練貞吉・黃始〔閱〕、諸九鼎〔較〕</p>	<p>袁擇菴・李湘北・徐嗜鳳〔總評〕</p>
<p>⑦行役日記</p>	<p>徐士俊〔序〕、許虬〔引〕、莊同生・韓則愈〔閱〕、許虬・王簾〔較〕</p>	<p>徐嗜鳳・周啓禱・吳本嵩・史惟圓・潘元白・任繩隗・吳逢原・蔣景祈・莊同生・吳興祚・杜濬・鮑讓公・陳大成・錢肅澗・葉闇・尤侗・錢中諧・吳之紀・趙澧・吳鏘・顧有孝・徐崧・吳兆寬・顧樵・顧理美・曹爾堪・曹鑑平・魏哲嗣・徐士俊・張振孫・方象瑛・毛際可・陸進・許虬・牛奐・諸匡鼎・徐汾・王嗣槐〔評〕、丁澎・柳葵・王溶・王濤〔總評〕</p>
<p>⑧快悅續紀</p>	<p>許虬〔序〕、黃周星・許虬〔閱〕、黃之翰〔定〕</p>	<p>黃周星・徐增・黃之翰・許虬・陸左城・汪文楨・洪昇・柳葵・董道權・沈家恆・吳儀一・姜晝貽・俞士彪・姜兆熊・張振孫・翁屆子・魏坤・張適・沈豐垣・陸子容・張砥中・蔣漢紀・諸匡鼎・吳相如・滑夏占・汪幼闇・周禹舌・汪森・俞敷伯・曹達夫・俾格〔評〕</p>
<p>⑨禽言</p>	<p>韓閔中〔序〕、張孺〔引〕、胡從中・張孺〔閱〕、韓閔中〔較〕</p>	<p>胡從中・韓閔中・李辰玉・蔣鑰・王亦世・董俞・張孺・李淦・徐乾學・馮道濟・莊同生・李漁・方炳・劉雷恆・徐士俊・葉臣遇・徐嗜鳳・陸進・王雅・陳謀道・陸子容・宋曹〔評〕</p>

エ. 王暉『蘭言集』

<p>⑩北野竹枝詞</p>	<p>沈謙〔序〕、孫治〔小引〕、 沈謙・孫治〔閱〕、陸進 〔較・跋〕</p>
<p>張養重・周亮工・朱一是・孫治・楊奎聲・徐士俊・毛奇齡・徐階 鳳・呂潛・沈謙・陸進・柏古・施閏章・蔣次日・張此韓・趙衍・ 沈豐垣・陸子容・顧穀臣〔評〕</p>	

『蘭言集』二十四卷、『牆東集』五卷、『幽光集』二卷、『聽松圖題詞』六卷、『千秋雅調』六卷の五種類でひとまとめになっている。のべ300名以上の人物の作品が収められている。特徴的なのは、掲載作品の作者について、字號や出身以外に進士または舉人になった年と官名が附されていることである(『千秋雅調』『幽光集』を除く)。内閣文庫藏。その構成と概要は以下の通りである。

①『蘭言集』(以下『蘭言』と稱す)二十四卷。朱一是舊序・王暉自序・例言十則(王暉)有り。王言校。王暉と交遊のあった人物たちが王暉に寄せた作品(詩・詞・文章・尺牘など。文體別)627題を集めたもの。目次題目の下に割注で「隨手編輯、不及銓次」とある。なお、収録作品數(詩は詩題數ではなく詩數)の多い人物は上から順に以下の通り。

韓魏(14作品)、莊同生(14)、張芳(13)、牛奂(13)、毛際可(12)、方象瑛(11)、徐階鳳(10)、季式祖(9)、張彥之(8)、張鋼孫(8)、諸匡鼎(7)、黃周星(7)、沈珩(6)、林嗣環(6)、徐士俊(6)、吳儀一(6)、丁濬(6)、沈謙(6)

②『千秋雅調』(以下『千秋』と稱す)六卷。李濤(述修)序、方象瑛(渭仁)題辭、尤侗(梅菴)引有り。王言校。王暉五十歳の年(康熙二十四「二六八五」年)に詠じた詩詞に友人たち數百名が唱和した作品、及び六十歳(康熙三十

四「一六九五」年」の壽詩を集めたもの。王嗣槐（字は仲昭。王暉の姪〈兄？〉）の跋文〈康熙三十四「一六九五」年〉、王暉の識〈康熙三十五「一六九六」年〉有り。

③『聽松圖題詞』（以下『聽松』と稱す）六卷。康熙戊寅〈康熙三十七「一六九八」年〉編纂。楊雍建（以齋）序。王言校。王暉「松溪主人傳」（『文集』にも採録）有り。張綱孫・徐乾學・吳興祚・張英・吳綺・余懷・歸莊・查慎行・徐鉉・丁澎・曹爾堪・魏禧ら多數の著名人たちが王暉の邸にある松を描いた「聽松圖」に題した賦・說・詩・詩餘・時曲・贊・題跋計115首が収められている。

④『幽光集』（以下『幽光』と稱す）二卷。莊同生（澹菴）序。名言四則（王崇簡・賀天生・徐士俊・周亮工）有り。王暉・王言校。王暉の父・王湛（端虹。一六〇六一一六七四）のために王暉の友人たちが制作した墓誌銘・墓表・傳記・哀辭・誄・行狀・壽序・壽詩・像贊など57題を集めた作品集。王湛の死後に刊行された。例えば、周啓雋・曹爾堪・徐嗜鳳・毛際可・吳之紀・張綱孫・王嗣槐・胡亶・丁澎らの作品が並び、末尾に黃周星が制作した「王母余孺人傳」（王暉の生母）が附されている。

前掲の吳儀一「本傳」によると、父王湛がこの世を去ると、王暉は「風雪の中たこが出来るほど千里を巡り、當世の能文者に告げて〈父のために〉志傳を制作して貰うことを乞^⑬い、『幽光集』を完成させた、という。なお、その時の日記が前掲の『行役日記』である^⑭。

⑤『墻東志』（以下『墻東』と稱す）五卷。張潮（山來）序。王暉の草庵である「墻東草堂」で友人たちが制作した詩文併せて152首を採録したもの。例えば、姜宸英・徐嗜鳳・張綱孫・黃周星・黃宗羲・吳儀一・林雲銘・毛際可・汪蟾らが作品を制作している。

以上は王暉の文人たちとの文學的な交流に關してだけでなく、當時の杭州を中心とした廣範圍な文人たちの交遊狀

況を示す重要な資料であるが、それだけに更に個別に詳細な考證が必要となる。本稿では紙数の都合もあり紹介だけに留めたい。

2. 王暉の家族について

さて、本節では王暉の家族について考察したいと思うが、残念ながら第三者の作品や史書など比較的客観的な資料では殆ど窺うことは出来ない。以下はあくまで前掲王暉の作品群に基づいた考證である。

①祖父母・大叔父・父母―王肇儀(祖父)・沈孺人(祖母)・王南溟(祖父の兄弟)・王石蓮(祖父の兄弟)・☆王湛【文2】¹⁶(父)・吳孺人(義母)・高孺人(義母)・余孺人【文1】(實母)・曹氏(湛の副室)

彼らについては王暉の「先考文學瑞虹公行述」¹⁷、『文集』卷十、「先妣余孺人行述」(同卷十)のほか、『幽光集』にも見ることが出来る。例えば、周啓雋「文學瑞虹王公墓誌銘」¹⁸、『幽光集』卷一に見られる。祖父は王肇儀、祖母は沈孺人。父は王湛(一六〇六一―一六七四)字は澄之、號は瑞虹。浙江錢塘の人。彼は純孝な性格で志高く、學問があつて經史を諳んじるほどであつたが、仕官することなく諸生に終わった。¹⁹後述の火災以來家財は傾き、葬儀や法事を行うのにも財が無く、物を質草に入れるほどであつた。康熙九(一六七〇)年、病に罹つて門を閉ざし、康熙十三(一六七四)年夏に病死した。享年六十九歳。祖父の王肇儀には王南溟という兄弟、つまり王暉の大叔父にあたる人物がいる。彼は崇禎九(一六三六)年、四川漢州の長官として赴任したが、その直後に王湛の實家が盗人の附け火に遭うという事件が発生し、逃げ遅れた祖母沈孺人を火中から救つたのが王湛だつたという。なお、この話は『今世說』卷一にも見られる

が詳細は不明。王石蓮も大叔父であり、前掲王暉の行述に見られる。王湛は初め吳孺人（處士吳玉渠の女）を娶り、次にその後妻となった余孺人（一六〇九—一六四六）が王暉の生母にあたる。彼女は浙江仁和の太學余玉鳴の女である。彼女については前掲王暉の「先妣余孺人行述」のほか、黃周星が「王母余孺人傳」（『幽光集』附録）を制作している。更にその後妻として高孺人（文學高遠旨の女）があり、王暉の弟王暉は副室の曹氏の子である。

②叔父—王溶【蘭4・千1・十1・世／文2・詩4・詞2】・王濬【千1・十1】

王暉の父王湛には二人の兄弟がいたが、その長幼や生母等詳細は不明である。王溶、字は驚瀾。錢塘の人。王濬、字は聖濤、杭州の人。特に王溶は「贈王丹麓姪」（『詩集』卷一）や「雜感之一」（『詩集』卷三）を制作し、一方の王暉も「驚瀾從父雜感詩跋」（『文集』卷九）、「雨後驚瀾叔招集池上張燈、看牡丹兼有明日之約」（『詩集』卷五）等を制作している。

③兄弟—王暉【幽】

王暉、曹氏の子。王暉の異母弟にあたる。室は柴氏（朝議大夫・福建鹽運使司であった師軒の女、丁亥（順治四「一六四七」年）の進士で貴陽太守の雲巖の妹にあたる）。周啓雋「文學瑞虹王公墓誌銘」に簡単に記されているだけで、これ以上は詳細不明。

④家弟—王九徵【蘭1・千1】・王復禮【千1】・王揆敘【尺1】・王東開【詩3・尺1】

王九徵、字は明侯。福建侯官の人。王復禮、字は草堂、浙江山陰の人。王揆敘、王東開については詳細不明。

⑤妻—陸氏【詞1】・☆鄒氏【後妻】

陸氏は浙江錢塘の人、學博の陸之遇【文1】（字は際明。『今世説』に記述有り）の女であり、陸進（字は盡思。後述）の妹。王暉に「惜分釵」悼「室陸氏」（『詞集』卷上）有り。また、陸氏の父の書簡に「與王丹麓壻」有り。陸氏は早

くにこの世を去ったようであり、後に鄒氏を後妻に迎えた。鄒氏は文學の公透（不明）の女。『今世説』卷八に記述があり、十六歳で王暉に嫁ぐ。更に「王丹麓年踰四十……」と言っていることから、鄒氏が後妻となったのは遅くとも康熙十四（一六七五）年以前のことか。

⑥子・孫—王鼎【十3】・王言【蘭・千・聽・幽・墻／全】詩1・尺4】・王鼎・☆王鼎【詞1】・☆王小能・長女【詩1】・次女【詩1】【以上子】・王紹恭・王紹融【詩1・尺1】【以上孫】

長子の王鼎、字は大受。『十種雜著』の序文・校訂を擔當する。のち胡氏（胡亶の姪）を娶る。次子の王言、字は慎旃。王暉の作品集の多くは王言が校訂や編集を擔當している。康熙四十一（一七〇二）年に、肺の病に伏し、醫者の薬も効果がなく、「金剛經」にて祈願したところ、恢復し一命をとりとめた、という（王暉「金剛經紀驗」〔『文集』卷九〕。作品として『聖師錄』『連文釋義』有り。三男の王鼎については、前掲周啓雋「文學瑞虹王公墓誌銘」に名前のみ記述されているが、詳しくは不明。王鼎、字は用和。四男と思われるが、王暉に「西河」哭長子鼎（『詞集』卷下）がある。あるいは王鼎の誤りか。王鼎が夭折したことは『今世説』卷五に記述があり、それによると、幼い頃より器量があり聰明であったが、十二歳でこの世を去ったという。五男の王小能（一六七七—一六八二）については王暉の「亡兒小能擴志」〔『文集』卷十〕のほか、『今世説』卷五・卷六にも記述が有る。それによると、幼少より才能があり、容姿も端麗であったが、六歳で夭折したという。王暉はその早すぎる死を痛く悲しんだ。

長女（名不明）、徐士鏞（字は柯亭）の妻。王暉に「憶長女餘杭」〔『詩集』卷十下〕詩有り。次女については、王暉に「病劇喜次女歸省」〔『詩集』卷五〕詩があり、恐らく何者かに嫁いでいたと思われるが詳細は不明である。

王紹恭は、長子王鼎の子。前掲周啓雋「文學瑞虹王公墓誌銘」に記述有り。王紹融、字は旭若。王言の長子で次孫。

⑦甥—王嗣槐【蘭1・檀1／詞】・王武功【千1】

王嗣槐、字は仲昭。錢塘の人。一説に兄(家兄)とも。宋琬に書簡「約王仲昭・張艸仙觀梅^②」有り。『皇朝文獻通考』卷二二六によると、著に『太極圖說論』十四卷があり、注に「…康熙己未薦舉博學鴻詞、不及與試、授內閣中書舍人以歸(…康熙十八(一六七九)年、博學鴻詞科に推舉されたが、試験には應ぜず、内閣中書舍人を授けられるも歸った)」と記す。また、張英『文瑞集』卷十九「送王仲昭還錢塘」詩の注に「…爲益都馮相國重客、詔以年老有文學、特豫中書舍人銜(山東益都の馮相國(馮傳、字は孔博、號は易齋。一六〇九—一六九二)の重客で、年老で文學があるため、特に中書舍人の位を與えることを詔した)」とある。王武功、字は雒榮。錢塘の人。詳細不明。

⑧親戚—王端淑「親族」【蘭?／文1】・何石雲「表弟」【蘭1／尺1】・湯以眞「表弟」【詞2】・☆陸進「義兄」【17】☆胡亶「長男の妻の叔父」【幽2・聽1／文1・詞1】・徐士鏞「娘婿」【全・詩2】

王端淑、字は玉映「映」、號は映然字。浙江山陰の人。閨秀。『清詩匯』卷百八十四によると王思任(字は季重。萬曆二十三年(一五九五)年の進士。一五七四—一六四〇)の女で、諸生の丁肇聖(不詳)の室となったという。王思任と王暉の家との具體的な關係は不明。詩に巧みで『玉映堂集』がある。王暉に「謝玉映大家送畫梅啓」(『文章』卷六)などあり。

何石雲、字は岱霑。錢塘の人。『雲南通志』卷十八上によると、貢生となり、康熙三十七(一六九八)年に雲南の阿迷州の知州となっている。また、湯以眞については、王暉に「【最高樓】春日送湯以眞之北雍」(『詞集』卷中)が有る。「北雍」とは北京國子監のこと。また「【滿江紅】輓表弟湯以眞郡守」(『詞集』卷下)が有り、何處かの郡守であったと思われるが、詳細不明。

陸進、字は盡思。浙江仁和の人。貢生、官は温州訓導。妻陸氏の兄。主に前掲『雜著十種』の評語や校訂・跋文を擔當した。王暉は彼の父陸之遇のために「祭學博茂林陸公文」(『文集』卷十。父王湛のために代作)を制作している。胡

賈、字は保林、號は勵齋。浙江仁和の人。順治六（一六四九）年の進士。右通政司。姪が王暉の長子王禔に嫁ぐ。胡氏の祖父は封中憲大夫・鴻臚寺卿の南臺であり、胡賈の叔父にあたる。胡賈の父は順治八（一六五一）年拔貢で知縣の師章である。王暉は、胡南臺の死後、「祭誥封中憲大夫鴻臚寺卿南臺胡公文」（『文集』卷十）を制作している。王暉に「與勵齋通政書」（『文集』卷六）あり。徐士鏞、字は柯亭。前述の通り、『霞舉堂全集定本』の校閲を擔當した。王暉の長女を妻とする。王暉は徐士鏞の父徐亮公の死後、「祭親家太學徐君亮公文」（『文集』卷十）を制作している。なお、文末に附録として試みに作成した「王暉家系略圖」を掲載したので併せて参照願いたい。

3. 交遊關係（1）——杭州近邊——

本節では、杭州およびその周辺の文人たちとの交遊を見てみたい。當然のことながら、王暉の交遊關係の中心は地元杭州およびその周辺の人物が多い。とりわけ、第一節で取り上げた王暉の作品⁽³⁾に提示されている出身地で数えれば、杭州府164名（杭州29・仁和縣55・錢塘縣58・餘杭縣10・遂安縣3・海寧縣8・建德縣1）、紹興府37名（山陰縣9・會稽縣12・蕭山縣14・餘姚縣2）となっており、かなりの割合を占めている。これに浙江・江蘇など江南やそれ以外の地方の人物、更に北京在住の王族や役人が加わり、王暉の交遊關係は中國沿岸部を中心に700名餘の大人數に及ぶ。試みに、現時點で判明している人物の出身地を地域別に算えると、以下の通りとなる。なお、浙江と江蘇に限り、主要州府で分けた。

浙江 296（杭州 164・紹興 37・嘉興 54・寧波 17・湖州 15・金華 3・麗水 3・臺州 3）

江蘇 179（蘇州 69・無錫 40・常州 17・松江 18・淮安 12・泰州 7・揚州 6・南京 5・通州 3・鎮江 2）

安徽27・山東11・福建14・江西9・河北9・河南7・山西2・廣東2・湖北6・湖南3・陝西2・四川2・雲南2・遼寧2・貴州1

むろん、その全貌について本論で總て述べ盡くすことは不可能ではあるが、著名人を中心になるべく多くの人物について紹介し、その一端を示すことにしたいと思う。

①西冷十子

西冷十子とは順治年間に杭州西湖で結成された文社の中心メンバーの事を指す。十子の具體的な人物については諸説あるが、陸圻・吳百朋・柴紹炳・孫治・陳廷會・張綱孫・毛先舒・丁澎・沈謙・虞黃昊が主要メンバーである。彼ら多くは杭州や錢塘など地元の文人であり、彼らの作品を収めた『西冷十子詩選』が編纂された。彼らは當時の杭州詩壇の中心的存在であり、王暉はその殆どと交遊關係を有している。また、彼らは全員『今世說』に取り上げられていることも特筆に價する。その人物の概要は以下の通り。

☆陸圻【檀1】(一六一四―?) 字は麗京。浙江錢塘の人。十子の中心的な人物。管見の限り、王暉との作品のやりとりは確認出来ないが、弟の陸堦【蘭2/文】(字は梯霞。浙江錢塘の人。『今世說』に記述有り)との關係や『檀几叢書』に作品が掲載されていること、また『今世說』にしばしばエピソードが登場することなどから、何らかの交遊があったに違いない。『清史稿』列傳二七一

☆吳百朋【聽1】字は錦雯。浙江錢塘の人。『清史稿』列傳二七一

☆柴紹炳【蘭1・評2】(一六一六一―一六七〇) 字は虎臣、號は省軒。浙江錢塘の人。『清史稿』列傳二七一

☆孫治【蘭1・十4/尺1】(一六一六一―一六八二) 字は字臺。浙江仁和の人。『清史稿』列傳二七一

☆陳廷會【蘭2・十4】字は際叔。浙江錢塘の人。

☆張綱孫【蘭8・牆2・幽1・松1・千1・十5・世・檀1／詩5・詞1】字は祖望、號は秦亭。浙江仁和の人。弟の☆張振孫【蘭1・幽1・十4】（祖定）とも交遊あり。王暉に「秋月喜沈友聖至自雲間、同張祖望小集分得青字」【詩集】卷六、「題張祖望隱居」【詩集】卷八、「滿江紅」過張祖望隱居」などあり。

☆毛先舒【蘭4・幽1・千1・十1・世・檀2／詩1・詞1・尺2】（二六二〇—一六八八）字は稚黃。浙江仁和の人。明の諸生。清に入って仕えなかった。後述「三毛」の一人。『清史稿』列傳二七一。王暉に「同毛稚黃夜坐」【詩集】卷五、「滿江紅」酬毛稚黃」【詞集】卷下）あり。

☆丁澎【蘭1・牆1・幽1・松1・千1・十1・世／詞1】（二六二二—一六八六）字は葯園。浙江仁和の人。順治十二（一六五五）年の進士。禮部。『清史稿』列傳二七一。王暉に「定風波」喜葯園祠部歸里」【詞集】卷中）あり。また、弟丁濬【蘭6・牆1・千1】（字は素涵）も『今世說』に見られる。

☆沈謙【蘭6・幽1・十3・檀1／詩・詞1】（二六二〇—一六七〇）字は去矜。浙江石門の人。『清史稿』列傳二七一。王暉に「阮郎歸」哀沈去矜」【詞集】卷上）あり。

☆虞黃昊【蘭1・幽1／詩1】字は景銘。浙江石門の人。『清史稿』列傳二七一。王暉に「小飲湖樓、同姜西溟・秦子臨・虞景銘諸子」【詩集】卷五）あり。

②三毛—毛奇齡・毛際可・毛先舒

三毛は清初の杭州を代表する文人たちであり、彼ら自身それぞれ幅広い交遊関係を有していた。彼らは王暉に多数の作品を提供したり、各作品集の序文や評語を制作しており、また王暉の元をしばしば訪ねてもいる。とりわけ毛際可が

王暉との間で最も作品を残している。なお、毛先舒に關しては前述しているのでここでは省略する。

☆毛奇齡【蘭3・千2・十2・檀1／文1・詩・詞】（二六三—一七一六）字は大可、號は西河。浙江蕭山の人。康熙十八（一六七九）年、博學鴻儒科に擧げられて翰林院檢討を授けられ、明史の編修にも關與した。官をやめた後は杭州に住み、經學關係の書を多數著した。その一方で詩人としても知られ、若い頃より杭州文壇で活躍した。『清史稿』列傳二六八。王暉に「寄毛大可啓」（『文集』卷六）あり。

☆毛際可【蘭12・墻1・幽1・千2・十5・世・檀1／全・文・詩6・尺2】（一六三—一七〇八）字は會侯、號は鶴舫。浙江遂安の人。順治十五（一六五八）年の進士。王暉に「草堂偶集」（注に「沈昭子太史・毛會侯明府・吳志上太學」と有り。『詩集』卷四）、「送毛會侯明府人都謁還」（『詩集』卷六）、「毛會侯明府七十」（『詩集』卷六）などあり。

なお、毛奇齡の兄毛萬齡とも交遊關係がある。毛萬齡【蘭5・十1／詞2】字は大千。浙江蕭山の人。王暉に「鶴橋仙」即席題贈毛大千廣文」（『詞集』卷上）、「滿江紅」秋日宋既庭・毛大千同過草堂」（『詞集』卷下）あり。

③杭州・紹興の友人

ア. 杭州（164名）

☆徐士俊【蘭6・幽3・十7・檀3／文1・詩2・詞1・尺3】（一六〇—一六八一）字は野君。浙江杭州の人。杭州の文人を中心とした尺牘を集めた總集『尺牘新語』の編者。王暉に「徐野君先生哀辭」（『文集』卷九）、「送徐野君先生歸西水」（『詩集』卷五）、「同徐野君先生・曉堂上人過鶴洲草堂」（『詩集』卷六）などあり。

柳葵【蘭3・聽1・千1・十2／文・詩1・詞1・尺1】字は靖公。浙江杭州の人。王暉の幼馴染み。七歳の時、王

暉とともに塾で學んだ。王暉に「摘紅英」爲柳靖公重卷」（『詞集』卷七）あり。

☆諸九鼎【蘭2・幽1・十2・檀1／詩2・詞2・尺1】字は駿男。浙江杭州の人。王暉に「送諸駿男之山東兼寄張祖望」（『詩集』卷五）、「賦得忽漫相逢是別筵送別。諸駿男即席和李字公三尹韻」（『詩集』卷六）、「合璧」冬夜季字公先生張樂會客送別。諸駿男即席賦詩、紙不暇給、爲譜新聲以紀槩」（『詞集』卷下）などあり。

☆諸匡鼎【蘭7・千1・十3／詩1・尺1】（二六三六—？）字は虎男。浙江杭州の人。九鼎の弟。王暉に「送諸虎男入楚赴撫軍幕」（『詩集』卷七）あり。

☆吳任臣【蘭1・十2／尺1】字は志伊。浙江仁和の人。康熙十八（一六七九）年、博學鴻儒に擧げられて翰林院檢討を授けられる。『清史稿』列傳二七一

沈筠【蘭1】字は開平。浙江仁和の人。吳任臣と同様に康熙十八（一六七九）年に博學鴻儒に召されて翰林院編修を授けられる。詩人。

應搗謙【十1】（二六一五—一六八三）字は嗣寅、號は潛齋。浙江仁和の人。明の諸生。康熙十八（一六七九）年に博學鴻儒に召されるが、固辭した。『清史稿』列傳二六七

☆吳儀謙一【蘭6・牆1・千2・十1・檀1／全・文・詩8・詞・尺2】（一六四七—？）字は舒鳧・璩符。號は吳山。浙江錢塘の人。『尺牘新語』の編者。王暉に「吳舒鳧逃禪圖贊」（『文集』卷八）、「吳舒鳧吳山草堂詞話」（『文集』卷十）、「懷吳舒鳧」（『詩集』卷三）、「吳吳山五十」（『詩集』卷四）などあり。

洪昇【蘭2・千1・十1／尺1】（一六四五—一七〇四）字は昉思、浙江錢塘の人。國子監生。戲曲『長生殿』の作者として有名。

馮景【牆1・千2・世】字は山公、一字少渠。浙江錢塘の人。國子監生。『清史稿』列傳二七一

陸次雲【聽1・檀1／詩1・尺1】字は雲士。浙江錢塘の人。王暉に「爲陸雲士美徐孝思明府贈園亭有作」(『詩集』卷五) などあり。

趙昕【蘭2・十2／詞1・尺1】字は雍客「誰客」、浙江餘杭の人。順治十八(一六六一)年の進士。嘉定知縣。王暉に「青玉案」送趙雍客之任嘉定」(『詞集』卷中) あり。

☆嚴沆【蘭1・幽1・聽1／詩1】(一六一七—一六七八) 顯亭、浙江餘杭の人。順治十二(一六五五)年の進士。少司農。『清史稿』列傳二七一。王暉に「嚴顯亭少司農六十」(『詩集』卷七) などあり。

孫應龍【蘭3・千2／尺1】、字は海門、浙江餘杭の人。順治四(一六四七)年の進士。德州(山東)知縣。

吳山濤【蘭1・千1／詩1】字は岱觀。浙江餘杭の人。王暉に「友莊菴十景和吳岱觀明府韻」(『詩集』卷十下) あり。

☆方象瑛【蘭11・千2・十5／全・文4・詩5席1】(一六三一?) 字は渭仁、浙江遂安の人。康熙六(一六六七)年の進士。内閣中書。康熙十八(一六七九)年、博學鴻詞科に擧げられ、翰林院編修を授けられる。『清史稿』列傳二七一。王暉に「健松齋續集題辭」(『文集』卷三)、「謝方渭仁太史送園茗土棗啓」(『文集』卷六) あり。なお、象瑛の兄方象璜【聽1・千1・檀2／詩1】(字は玉山、號は雪岷)とも交遊あり。

朱一是【蘭1・十1／尺1】、字は近修、浙江海寧の人。崇禎十五(一六四二)の進士。『杜樊川集』の評者。

沈珩【蘭6・幽1・千1・十1／文・詩1】(一六一九—一六九五) 字は昭子、號は耿岩・稼村「邨」。浙江海寧の人。康熙三(一六六四)年の會元、康熙十八(一六七九)年、博學鴻儒に擧げられ翰林院編修を授けられる。王暉に「輓沈稼邨太史」(『詩集』卷六) あり。

查繼佐【蘭1・幽1・聽1】(一六〇一—一六七六) 字は秀三、また友三、號は伊璜・與齋など。浙江海寧の人。崇禎六(一六三三)年の擧人。著に『罪惟錄』『魯春秋』『續西廂』等有り。

查慎行【聽1】（一六五〇—一七二七）字は字は悔餘、號は橋洲・初白。浙江海寧の人。詩人として知られる。黃宗羲の弟子。康熙三十二（一六九三）年舉人、康熙四十二（一七〇三）年進士。翰林院編修。

范驥【幽1・聽1・十3／詞1・尺1】（一六〇八—一六七五）字は文白、號は默庵。浙江海寧の人。明の貢生。

イ. 紹興（37名）

☆姜希輒【蘭2・幽1・千1／詩3】（？—一六九八）字は二濱、號は定庵。浙江會稽の人。明・崇禎十五年に舉人となり、清の世に入つて温州教授に除せられた。その後工科給事中となり、順天府の丞にまでなった。『清史稿』列傳六十九

☆吳興祚【聽1・十1／詩2】字は伯成、浙江山陰の人。兩廣總督。『清史稿』列傳二十六。王暉に「寄吳伯成制府」【『詩集』卷六】、「送吳伯成觀察之任福建」【『詩集』卷七】などあり。

☆黃宗羲【墻1・檀2】（一六一〇—一六九五）字は太仲、號は南雷・梨洲老人、浙江餘姚の人。王暉の友人には、復社の關係者もしばしば見られる。『清史稿』列傳二六七。なお、『今世説』には季弟の黃宗會（字は澤望）についても言及されており、また評林には宗羲の子百家【檀2】（字は圭一、號は不失）の名も見られる。

他に王暉と同じ里仁和の友人としては、☆張壇・☆張竣・☆張汾・☆陸繁弨・☆洪景融・☆卓人阜・☆周禹古・張競光・汪蟾・余一淳・蔡汝齊・沈璿・姚際恆・胡修禕・金侃・兪杰・兪沈樹・蔣漢紀・張泰・沈元琨・沈豐垣・呂澄・丁介らがいる。

また杭州には、☆張元時・☆徐林鴻・☆茅兆儒・☆胡貞開・吳松・汪光被・朱宗文・錢肇修・陳枚・關仙圃・黃敬修・

張士茂、「以下餘杭」陸嘉淑・嚴會樂・董宗城・沈士瑛「以下錢塘」☆林璐・☆顧豹文・☆吳農祥・☆陸售・☆陸雋・☆李式玉・高士奇・許田・張適・吳允嘉・陳晉明・翁介眉・張振孫・吳陳琰・虞汝翼・翁高年・徐旭旦・徐逢吉・高式青・金張・孫鳳儀・仲陳清・汪駉・吳觀・何喬雲・毛宗亶・何且純・沈蘭先・徐瀨らがあり、枚擧にいとまが無い。

また紹興には、「以下山陰」☆徐緘・張陸・胡兆鳳・史許・祁彥佳「以下會稽」☆馮肇杞・姜壺・羅坤・馮太拙・朱士會・唐九經・金燾らがいる。王暉の杭州・紹興における交遊ネットワークの緊密さと廣範さが窺い知れる。

④僧侶

僧侶は當時各地を旅して、文人たちの間を行き來する場合がしばしば見られる。王暉の友人にも僧侶が20名ほどおり、出身地はまちまちであるが、杭州の寺に在住していたり、杭州に立ち寄りたりしている。場合によっては書簡の傳達役も擔っていた。僧侶との交遊關係について詳しくは拙論^(註)を参照されたいが、王暉と交遊のあった僧侶について以下主な人物を簡單に見ておこう。

全體的に見ると、當時江南で文人たちと盛んに交流していた臨濟宗天童派（寧波の天童山景德寺の住持、密雲圓悟〔一五六六—一六四二〕が中心）に連なる僧侶が多い。例えば、豁堂正「濟」岳【蘭2・幽1／尺1】（一五九七—一六七〇）、杭州淨慈寺）、碩揆原志【蘭1】（一六二八—一六九七、杭州靈隱寺）、栗菴濟乘【千1／文1】（杭州香積寺）などは、みな王暉の地元杭州の寺に在住しており、しばしば王暉の元を訪ねている。また曹洞の僧侶亭淨挺【蘭2・檀1】（俗名徐繼恩。一六一五—一六八四）は王暉と同郷である。更に宗派は不明であるが、釋弘修【千1／文1】（浙江會稽の人。會稽雲門寺の僧）がいる。

鑿微元暉【蘭1・牆2／詩3・文2】（一六三七—？）は福建福清の人で、定海（浙江舟山祖印禪寺？）で出家した

が、師や在任の寺などは不明である。しかし、朱彝尊や查慎行をはじめ、王暉の友人でもある范驥（文白）、朱溶（若始）、吳儀一〔前掲〕、姜宸英〔後掲〕、吳允嘉（志上）等と交遊があり、詩人としてまた畫家としても活動していた。王暉のいる杭州にもしばしば訪ねていた。王暉に「鑒微上人五十序」〔文集〕卷三が有り、彼の人となりを述べている。

釋德信【蘭1／文1・詩4】號は恬庵。浙江德清の人。彼は『霞舉堂全集定本』の序文を制作した徐倬（後述）と同族で、序文制作の依頼は恬庵を通じて行われた。

このほか、釋堯南【千1】（江蘇太倉の人。梁溪（江蘇無錫）大覺寺の僧）・中洲海嶽【詩1・尺1】（江蘇鎮江の人。安徽黃山慈光寺の僧）・心壁淵【詩1】（廬山（江西九江）開先寺の僧）・鐵夫元立【蘭1／詩1・文1・尺1】（俗名張立。陝西山陽の人。焦山寺（江蘇鎮江）の僧）・晦巖真燭【烟】【蘭1／尺1・詩1】（江蘇吳縣の人。浙江嘉興の金明寺の僧）などの名が見られ、詩文のやりとりが行われている。

4. 交遊關係（2）——江南およびその周邊——

① 江南の文人

前節に示した通り、王暉の交遊關係について、杭州・紹興に次いで多いのは江南（南京・蘇州・無錫・嘉興など江蘇・浙江の長江南岸）や安徽周邊の人物である。概観すれば、杭州と隣接する嘉興（嘉善・海鹽・桐郷・秋水・平湖）、明代より文化の中心として著名人が集まる蘇州（長洲・吳江・吳縣・崑山・太倉）、太湖のほとりで街道の要所でもある無錫（宜興）が多く、次いで寧波（鄞縣・慈谿）、常州（武進・毘陵・溧陽・金壇）、松江（華亭・青浦）、徽州（歙縣・

休寧)等と續く。便宜的に各地區に分けて代表的な人物を示したが、一部詳細が不明な人物もあり、今後と課題とした。
い。

ア. 浙江

a. 嘉興 (54名)

☆曹溶【蘭2・千1・十1／文1・詞1・尺1】(二六一三—一六八五)字は鑿躬、號は秋嶽・倦圃。浙江嘉興の人。
崇禎十(一六三七)年の進士。御史。『清史稿』列傳二七一。王暉に「曹秋嶽侍郎招飲來山堂、卽事分賦。時有枝書在座」(『詞集』卷下)などあり。

☆曹爾堪【蘭3・幽1・聽1・十1／文1・詞3・尺1】(二六一七—一六七九)字は顧庵。浙江嘉善の人。順治九(一六五二)年の進士。詩人として知られる。王暉に「謝曹顧菴學士送雲布啓」(『文集』卷六)、「滿江紅」謝曹顧菴先生惠序言奉次原韻(『詞集』卷下)あり。

このほか、☆魏學渠・☆王庭・曹三才・孫琮・周簞・胡應辰・王沆・沈進・徐在・柯維楨・沈鎰遠・魏哲嗣・陳喆倫・顧戩宜・曹鑑平らがいる。

b. 寧波 (17名)

☆史大成【蘭1・幽1】(二六二二—一六八二)字は及超、號は立庵、浙江鄞縣の人。

姜宸英【蘭4・牆1・十1／詩1・尺1】(二六二八—一六九九)字は西溟、號は湛園。浙江慈溪の人。康熙三十六(一六九七)年の進士(探花)、翰林院編修。『清史稿』列傳二七一。王暉に「小飲湖樓同姜西溟・秦子臨・虞景銘諸子」(『詩集』卷五)などあり。

このほか、洪圖光・范光文・林時對・周斯盛・董道權・陳錫嘏・王雅・姜兆熊・王堯臣らがいる。

c. 湖州 (15名)

徐倬【聽・千・十1/全・詩1】(一六二四—一七一三) 字は方虎、號は蘋村。浙江德清の人。康熙十二(一六七三)年の進士。翰林院編修、侍讀。

☆嚴允肇【蘭1・幽1・墻1・千1・十1・世1/尺1】、字は修人。浙江歸安の人。順治十八(一六六一)年の進士。山東知縣。

このほか、韋人鳳・閔幾・何子雲・金行遠らがいる。

d. 金華 (3名)

李漁【十1】(一六二〇—一六八〇) 字は謫凡、號は笠翁。浙江蘭溪の人。後蘇州に寓居する。清初の戯曲家。

イ. 江蘇

a. 蘇州 (69名)

高簡【千1】(一六三四—一七〇七) 字は澹游、號は旅雲。江蘇蘇州の人。畫家。

褚人穫【文・詩1・詞3・尺1】(一六三五—一七〇四以降) 字は稼軒・學稼。號は石農。江蘇長洲の人。王暉に「立夏後一日、喜褚稼軒枉過、即送歸吳門」(『詩集』卷六)、【醉春風】甲申五月爲褚稼軒七十壽(『詞集』卷中) などあり。

☆尤侗【蘭3・千2・十3・檀4/詩3・詞1・尺1】(一六一八—一七〇四) 字は展成、號は悔庵、江蘇長洲の人。

康熙十八(一六七九)年に博學鴻儒に召されて翰林院編修となる。『清史稿』列傳二七一。王暉に「尤定中孝廉過訪兼

接令兄悔菴書」(『詩集』卷六)、「贈尤悔菴司李六十和原韻」(『詩集』卷六)、「尤悔菴太史西湖漫興索和次韵四首」(『詩集』卷六)などあり。

☆朱鶴齡【蘭1】(一六〇六一—一六八三)字は長孺、浙江吳江の人。明の諸生。杜甫詩の注釋者としても知られる。

『清史稿』列傳二六七

☆徐鉉【蘭1・聽1・千2・／文・詩2】(一六三六一—一七〇八)字は電發、號は虹亭、浙江吳江の人。康熙十八(一六七九)年、博學鴻詞。翰林院檢討。『清史稿』列傳二七一。王暉に「題徐電發菊庄圖」(『詩集』卷五)あり。

歸莊【蘭1・聽1】(一六三十一—一六七三)字は元恭、江蘇崑山の人。詩人。

徐秉義【聽1／詩1】(一六三三—一七一)字は彥和、號は果亭。江蘇崑山の人。康熙十三(一六七三)年の進士(探花)。少詹事。

このほか、☆葉闇・☆宋實穎・☆顧有孝・☆趙漢・申穆・蔡万炳・俞場・鄭道煌・徐垓・吳時森・徐崧・吳之紀らがいる。

b. 無錫(40名)

☆徐階鳳【蘭10・牆3・幽2・聽1・千1・十6・世／文1・詩1・詞2・尺2】字は竹逸、浙江宜興の人。弟徐鳳【十2／詞1】(竹虛)とも交遊あり。王暉に「徐竹逸司李像贊」(『文集』卷八)、「鷓鴣天」坐雨忽憶徐竹逸」(『詞集』卷上)などあり。

☆周啓崑【雋】【蘭4・幽1・聽1・十2／文1・詩1・詞1・尺1】字は立五。江蘇宜興の人。順治四(一六四七)年の進士。鴻臚寺少卿。「周立五侍講像贊」(『文集』卷八)、「飲周立五太史寶誠堂」(『詩集』卷六)、「滿江紅」寄懷陽羨周立五・徐竹逸兩先生三用回韻」(『詞集』卷下)などあり。

蔣景祁【蘭4・千1・十1／文1・詩】（二六四六一一六九五）字は京少、江蘇宜興の人。貢生。博學鴻詞科に擧げられるも、赴かなかつた。詞集總集『瑤華集』（康熙二六〇一六八七）年序の編者。

このほか、☆錢肅潤・秦松齡・嵇永仁・黃沂・陳大成・顧貞觀・嚴繩孫・劉雷恆・劉霖恆・周繼高・顧彩・薛信辰・陳維岱らがいる。

c. 松江（18名）

☆張彥之【蘭8・千1／全】一名愨、字は洮侯。浙江華亭の人。詩人。

☆柏古【蘭3・十1】、字は斯民、一字は雪耘。號は白牛牧人。浙江華亭の人。書畫家。

このほか、☆董俞・☆朱溶・☆周綸・☆張光曙・☆田茂遇・蔣平階らがいる。

d. 常州（17名）

☆惲格【蘭2・千1・十1／詞1・尺1】（二六三三一六九〇）字は正叔。江蘇武進の人。畫家として有名（四王吳惲）。『清史稿』列傳一九二。王暉に「少年遊」送惲正叔歸毘陵」（『詞集』卷上）などあり。

☆陳玉璫【蘭1・十3・檀1／文1・尺1】字は廣明、號は椒峰。江蘇武進の人。王暉に「學文堂文集序」（『文集』

卷二）あり。

☆莊同生【蘭14・幽1・十3／文2・詩3・尺3】（二六二七一六七九）字は玉驄、號は澹庵。江蘇武進の人。順治四（一六四七）年の進士。侍讀。王暉に「贈莊蝶菴彈琴序」（『文集』卷三）、「謝莊澹菴太史惠手畫送子大士啓」（『文集』卷六）、「題莊澹菴太史西山秋爽圖次韻」（『詩集』卷六）、「送莊澹菴太史歸毘陵」（『詩集』卷十上）、などあり。

このほか、☆蔣鑰・邵衡・呂方嘉・☆鄒祗謨・楊大鶴・毛端士らがいる。

e. 泰州（7名）

王熹儒【詩3】字は歙州、號は忽齋。江蘇興化の人。兄王仲儒とともに詩人として知られる。王暉に「贈王歙州」【詩集】卷五)、「茂承堂雅集分得金字」【詩集】卷五)、「題王歙州天女圖」【詩集】卷十上)あり。

季式祖【蘭9】詩1・詞2・尺1】字は孚公、江蘇泰興の人。錢塘の縣丞。王暉に「漁家傲」雪夜小集敦好齋次季孚公少尹韻」【詞集】卷中)などあり。

このほか、☆李淦・☆黃雲・黃泰來らがいる。

f. 揚州 (6名)

☆吳綺【聽1/詞1】(二六一九—二六九四)字は蘭次、江都「揚州」の人。詞人として名を知られる。貢生で、のち湖州知府となる。『清史稿』列傳二七一。王暉に「念奴嬌」慰吳蘭次先生次余澹心韻」(卷下)あり。

韓魏【蘭14・千1/文1・詩2・詞1・尺1】字は醉白、江都「揚州」の人。王暉に「東軒集序」【文集】卷二)「答韓醉白次來韻」【詩集】卷四)、「雪後喜韓醉白止宿草堂次韻」【詩集】卷五)などあり。

このほか、☆汪懋麟・☆宗元鼎らがいる。

g. 南京 (5名)

☆黃周星【蘭7・牆1・幽2・十2・檀2/文1・尺1】(二六一—二六八〇)字は九烟、浙江江寧の人。詩人として名を知られる。王暉に「紀黃九烟先生語」【二則】【文集】卷九)などあり。

☆紀映鐘【幽1・十1/詩1・詞1】(二六〇九—?)字は伯紫、號は慙叟。浙江江寧の人。詩人として知られる。王暉に「寒食前一日紀伯紫棹歸白下過予話別走筆贈行」【詩集】卷五)などあり。

このほか、鄧旭・丁灝・張愨がいる。

これ以外の地域で特筆すべき人物を数名挙げておく。

張芳【蘭13・聽1・千2・檀1／詩1・詞1】字は菊人、江蘇句容（鎮江）の人。王暉に「花朝新霽、同張菊人明府泛湖、次日以詩索和即倚來韻」〔『詩集』卷六〕、「沁園春」雪中答張菊人明府見寄即次來韻〔『詞集』卷下〕あり。

☆宋曹【蘭2・十1／詩1・尺1】（二六二〇—一七〇二）字は彬臣、號は射陵、江蘇鹽城（淮安）の人。詩人、書家。王暉に「題宋射陵內翰疏枰圖」〔『詩集』卷十上〕あり。

☆嵇宗孟【蘭2・十3】、字は淑子。江蘇山陽（淮安）の人。崇禎九（一六三六）年孝廉。杭州知府。

ウ. 安徽

a. 徽州（14名）

張潮【蘭3・牆1・檀9／文5・詩3・尺3】（一六五〇—一七〇九？）字は山來、號は心齋居士。安徽歙縣の人。『檀几叢書』の共編者。また、王暉は張潮編纂の『虞初新志』『昭代叢書』の編纂にも協力し、自らと息子王言の作品が収録されている。詳しくは拙論⁴⁶⁾参照。王暉に「張山來五十序」〔『文集』卷三〕、「答張山來次元韻」〔『詩集』卷六〕「爲張山來悼亡」〔『詩集』卷十下〕などあり。

☆汪楫【詩1】（二六二六—一六八九）字は舟次、號は悔齋。安徽休寧の人。王士禛の門人。康熙十八年、博學鴻詞科。翰林院檢討を授けられ、明史編修に携わった。康熙二十一年（一六八二）年、琉球冊封正使に任せられ、琉球に派遣された。『清史稿』列傳二七一。その際王暉も送別の詩「送汪舟次太史出使琉球」〔『詩集』卷六〕を寄せている。歸國後、河南知府・福建按察使および布政使等を歴任した。

このほか、☆夏基・☆閔麟嗣・汪徵遠・吳相如・汪文柏らがいる。

b. 宣州（4名）

☆施閏章【蘭4・十1／文1・詩2・詞・尺1】（一六一八—一六八三）字は尙白、號は愚山。安徽宣城の人。順治六（一六四九）年の進士。侍讀。王暉に「謝施愚山少參送錦輓啓」【文集】卷六、「送施愚山學使備兵湖西」【詩集】卷六）などあり。『清史稿』列傳二七一

梅文鼎【千1・檀1／詩1】（一六三三—一七二二）字は定九、號は勿庵。安徽宣城の人。王暉に「題梅定九飲酒讀書圖」【詩集】卷八）あり。

このほか、沈泌・濮陽錦がいる。

②江南以外の文人

地域的に見ると、山東や河南・湖北・福建など多岐に涉るが、あくまで出身であり、實際は江南で活動していた人物が多い。ここでは、代表的な人物のみ挙げておく。

牛奂【蘭13・十1／文3・詩3・詞1・尺2】字は潛子。山東長治の人。杭州富陽縣の知縣。王暉の作品に「答牛潛子明府送犀杯啓」【文集】卷六、「風流子」贈牛潛子明府【詞集】卷下、「與牛潛子明府」二種有り【尺牘】卷一）など赴任時の作品が多数見られる。

☆魏禧【蘭1・幽1・聽1・十3／文1・詞1・尺1】（一六二四—一六八一）字は冰叔、江西寧都の人。清初の文章家。『清史稿』列傳二七一。「答魏水叔送萊玉啓」【文集】卷六、「別銀鏡」與魏水叔沈甸華夜話【詞集】卷中）などあり。なお、『今世説』に「魏氏三子」として兄魏祥（一六二〇—一六七七）・弟魏禮（一六二八—一六九三）とともに記述有り。

☆周亮工【蘭1・幽1・十1／詩1・詞2・尺2】（二六一二—二六七二）字は元亮、號は樸園。河南祥府の人。王暉に「周樸園侍郎書至兼示詩集」（『詩集』卷五）、「滿江紅」爲周樸園司農賦次馮幼將韻」（『詞集』卷下）、「鶯啼序」辛亥冬日、同諸子陪周樸園司農・韓秋巖大令・方與三孝廉泛舟西湖、抵暮泊岸、適袁捧菴水部至自吳門、樸翁特爲治、具獲移棹中流、深夜忘醉喜而賦此」（『詞集』卷下）などあり。息子周在浚（字は雪客）も『蘭言』に作品が掲載されている他、『今世説』にも記述がある。

☆林雲銘【蘭5・墙2・千2・世／文3・詩1・尺2】（二六二八—？）字は西仲。福建閩縣の人。順治十五（一六五八）年の進士。徽州府通判。王暉に「吳山穀音序」（『文集』卷二）、「雪窗倡和詩序」（同卷二）、「謝林西仲使君送橄欖啓」（同卷六）などあり。

余懷【聽1・千1・檀1／詞1】（二六一六—一六九六）字は澹心、號は曼翁・曼持老人。福建莆田の人。『板橋雜記』の作者。若い頃南京に寓居し、晩年は蘇州に隱居した。

☆杜濬【十2】（二六一—一六八七）字は于臯、號は茶村。湖北黃岡の人。詩人。明の遺民。『清史稿』列傳二八八 靳治荆【詩1】字は熊封、號は書樵・雁臣。滿軍鑲黃旗の人。安徽歙縣知縣。王暉に「酬靳熊封使君」（『詩集』卷四）あり。

このほか、☆高珩・☆唐夢賚・☆趙鑰・☆楊體元・☆辛民・☆王猷定・☆高兆・☆林嗣環・☆曹國梁などがある。

③王族・役人

これまで見た中にも役人は存在したが、ここでは特に北京に在住していた中央の官僚、また王族について挙げておこう。

☆宋攀【蘭1・千1・檀2／文1】（一六三四―一七一四）字は牧仲、號は漫堂。河南商丘の人。順治四（一六四七）年、召試によって登用され、のち康熙三（一六六四）年黃州通判となり、巡撫等を経て最終的には吏部尚書となった。『清史稿』列傳二七四。王暉に「與宋漫堂中丞書」（『文集』卷六）あり。

李天馥【蘭1・聽1・十1／文1・詞1・尺1】（一六三五―一六九九）字は湘北、號は容齋。河南永城の人、のち安徽合肥に住んだ。順治十四（一六五七）年の進士。のち國子監司業、工部尚書等を歴任し、武英殿大學士に封ぜられた。『清史稿』列傳二六七。王暉に「與李容齋學士書」（『文集』卷六）あり。

☆王士禛【幽1／詞1】（一六二六―一六七三）字は子底、號は西樵。山東新城の人。順治十二（一六五五）年の進士。山東萊州の教授・國子監助教を歴任し、吏部考功司員外郎となる。王士禛の兄。『清史稿』列傳二七一。王暉に「滿江紅」讀曹顧菴學士・王西樵考功・宋荔裳觀察三先生倡和詞次韻」（『詞集』卷下）あり。

☆王士禛【檀3】（一六三四―一七一）字は貽上、號は阮亭・漁洋山人。山東新城の人。順治十五（一六五八）年の進士。戶部侍郎・國史副總裁・都察院左都御史・刑部尚書などを歴任した。王暉と直接の作品のやりとりは見られないが、王暉・張潮共編の『檀几叢書』に複数作品が収められていること、『今世説』にたびたび登場すること、そして前項のように兄王士禛との交遊がある事などから総合的に見て、何らかの交流はあったと推定される。

☆張英【聽1】（一六三七―一七〇八）字は敦復、號は龍眠。安徽桐城の人。康熙六（一六六七）年の進士。文華殿大學士・禮部尚書。『清史稿』列傳二六七。

☆宋琬【詩1・詞1】（一六一四―一六七三）字は玉叔、號は荔裳。山東萊陽の人。順治四（一六四七）年の進士。吏部郎中、浙江按察使、四川按察使などを歴任した。詩人としても知られ、朱彝尊・王士禛らと交遊有り。『清史稿』列傳二七一。王暉に「初夏同宋荔裳觀察・莊澹菴太史暨留山・宋幼文泛湖至壑菴卽事」（『詩集』卷六）などあり。

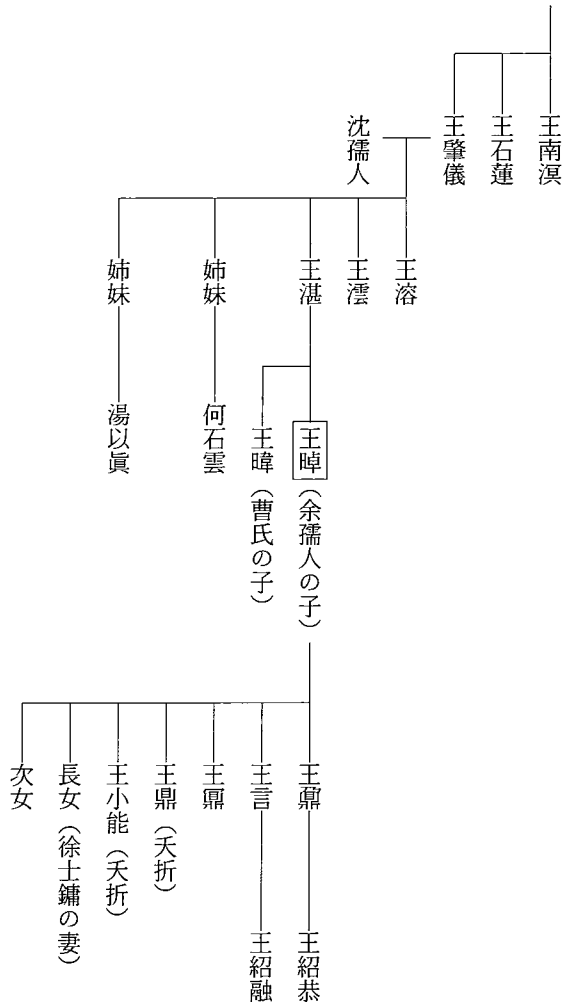
☆王崇簡【幽1】（一六〇二—一六七八）字は敬哉。河北宛平の人。崇禎十六（一六四三）年の進士。清の世になって、國子監祭酒、吏部左侍郎を歴て禮部尙書となる。

愛新覺羅博爾都【詩1】（一六四九—一七〇八）字は問亭。康熙帝の又従兄弟。二等輔國將軍。詩人としても知られた。『清史稿』列傳二七二。王暉に「題博問亭將軍東臯漁父圖奉和原韻」（『詩集』卷六）あり。

おわりに

以上、王暉の人物と作品および交遊關係についてその概要を述べたが、まだその表面を窺ったに過ぎず、更なる調査・考察が必要であろう。ただ一つ言えるのは、王暉は文才に優れていただけではなく、その無口で穩やかな人柄が文人たちの好評を得、彼の周圍に他數集まった事は十分考えられる。王暉自身だけではなく、それが他の文人同士の交遊をも繋ぐ媒介として役割を果たしたとも言えるであろう。とりわけ當時獨歩の機運が高く、明末に盛んに活動していた文社・詩社の名残が存在していた杭州において、王暉が重要な役割を果たしたことは想像に難くない。その結果、王暉と友人たちとの間で多數の作品が制作され、遺されたのであろう。本稿ではその交遊の幅廣さを示すために、敢えてなるべく網羅的に多くの人物を擧げて概観したが、今後は特に關係の強い人物もしくはグループに絞って考察を深めていくことによって、當時の文人交遊ネットワークの一端を明らかにして行きたいと考えている。

參考資料「王暉家族略圖（推定）」



注

- (1) 例えば、「張潮の交遊關係について—『尺牘友聲集』と『尺牘友聲偶存』を手がかりに—」(『漢學會誌』第五十二號・二〇一三年三月)、「張潮と江南文人の交流—書簡を手がかりに—」(『中國古典小説研究』第十八號・二〇一四年三月)等。
- (2) なお、王暉に關する先行研究としては、陳文新「《今世說》與王暉心態」(『明清小説研究』一九九〇年第一期)、陳大康「王暉

和他的《今世說》」(『明清小說研究』一九九四年第一期)、歐明俊「王暉和他的小品」(『文史知識』二〇〇一年第八期)、李桂芹「《千秋雅調》與清初江南隱逸風氣」(『南昌大學學報(人文社會科學版)』二〇〇九年第二期)等があるが、後述の王暉『今世說』に關する論考が多く、管見の限り彼の交遊關係全體を概観したものは見られない。

(3) 「霞舉堂全集定本」冒頭部分

(4) 「王丹麓、名暉、錢塘城北里人也。……十三試有司補縣學生、名譽隆洽。癸卯、年二十八、得喉閉疾瀕死、醫者謂攻苦所致、父令棄舉子業、三年始開。初丹麓過仙林橋、遇一道士語之曰、郎君已閱三災、尙餘四難、過此當大有名於世、惜不富貴耳。至是果驗。丹麓既謝巖籍杜門、聚所藏經史子集數萬卷於霞舉堂縱觀之。凡讀一書、必首尾貫穿胸中、始放去意、有所得便信紙書之。以及問遺贈答詩詞尺牘片言隻字、具有元本。其所論著事理兼該、小大畢舉、靡不終始條貫斐然成一家言。學者嗟嘆之、每一篇稟就購求、競寫流傳海內。家居北郭江漲橋西、爲往來舟車之衝。賢士大夫過武林者、必先造其廬、問字納交、停輒不忍去。常束身自下、惘々如山中人。處衆人中不先一語、名士蕪集、故未嘗不在、竟日冲然、若不知其在坐者。事父嚴謹、無事必侍左右。自少至壯、無一夕外宿。……」

(5) 初集(一六九五)・二集(一六九六?)・餘集(一六九八?)

(6) 「草堂內設置書尺、每歲積四方投贈詩文及諸雜編、於除夕量之、準以六尺上下。七尺外爲贏、五尺內爲絀。雅惡論人短失、見客有佳句張之。恐後其以詩古文辭書牘遺己者哀次、贈言如千卷、刊布流傳」

(7) 「先是戊午春詔徵天下博學隱逸之士、京師貴人多欲以丹麓應辟召、知其志不可奪、相與太息而罷」

(8) 「先生詩文向有霞舉堂集・塙東雜鈔兩刻、其板俱藏家塾而四方好古力學諸君子每至坊間購求不得、甚爲失望。今本坊特請先生後兩集、合梓一編、勒成定本。懸諸國門以公同好」

(9) 本稿では、便宜的に活字本(中國文學參考資料小叢書第一輯・古典文學出版社・一九五七年)を使用した。

(10) 「汪太史舟次、林使君西仲、毛大令會侯、朱處士若始、一見是書、逐相欣」

(11) 「丁儀部藥園、孫子字臺、張子祖望、毛子稚黃、陸子蕪思、諸子虎男、各出案頭新書、慨然借錄」

(12) 「是書原與同人互相參訂、集中所載先君實行二條、皆同人從志傳探入、故名字稱謂、一從本文、非暉敢附於臨文不諱之義也。至暉平生、本無足錄、向承四方諸先生贈言、頗多獎借、同人即爲節取一二、強列集中。實增愧惡」

(13) 「風雪中重趺走千里、徧告當世能文者乞爲志傳」

(14) 『行役日記』冒頭に「……甲寅七月、不幸遭先君子之變、……願不遠千百里、以求四方之能文者」云々とある。

(15) 『今世説』に記述のある人物については、名前の前に☆を附けた。以下同じ。

(16) 以下、各人物の関連作品について所在と數を提示するが、便宜的に以下の通り稱す。『蘭言集』↓蘭・『墻東志』↓墻・『聽松圖詞』↓聽・『千秋雅調』↓千・『雜著十種』↓十・『今世説』(序文・評林のみ)↓世・『檀几叢書』↓檀／『霞學堂全集定本』↓全・『霞學堂文集定本』↓文・『霞學堂詩集定本』↓詩・『霞學堂詞集定本』↓詞・『霞學堂尺牘定本』↓尺。なお、各作品の序文・評林・校閲等を擔當している場合は傍線を附け、『雜著十種』のみ數を挙げた。

(17) 「先君諱湛、字澄之、一號瑞虹、世爲仁和人、聚居長版卷。少有大志、端重不佻、讀書鄉塾中、不與常見伍、里黨成器重之。性純孝、大父肇儀公、積學苦志、老而不遇。家日益落、先君甫垂髫、卽任家政、竭力以事大父母、承歡朝夕、若忘其貧。崇禎丙子、曾叔祖南溟公、出守漢州。趣裳赴任。舟旣發而盜不知。夜入吾家。恨無所獲、逐縱火。當火猝起、族人取簿券、獨曾祖母沈、年老不能行。倉皇無措、火愈熾。先君方欲大聲呼救、忽見祖母在烟焰中、挺身負之、以出餘悉無所携。時不孝時方在母娠、將彌厥月、聽其匍匐不顧也。自是家業蕩然、卜居錢塘之城北里。…」

(18) 「…公生萬曆丙午三月三十日卯時、卒康熙甲寅七月十一日未。時壽六十有九。娶孀人吳氏、處士玉渠公女。繼娶孀人余氏、太學玉鳴公女。又繼娶孀人高氏、文學旨遠公女。副室曹氏。子二、長暉邑庠生。余孀人出。娶陸氏、學博茂林公女。繼娶鄒氏、文學公遠公女。次子暉、曹氏出。聘柴氏、封朝議大夫・福建鹽運使司師軒公女、丁亥進士貴陽太守雲巖公妹。孫三、長鼎娶胡氏、封中憲大夫鴻廬寺卿南臺公孫女、己丑進士・通政使司右通政勵齋公姪女、辛卯拔貢・候選知縣師章公女。次言、次鼎、曾孫紹恭、俱幼未聘。長君秉公之教不同。…」

(19) 『明史』列傳一六五に「太倉諸生」の王湛がいるが、別人であらう。

(20) 周啓雋「文學瑞虹王公墓誌銘」「雖終於諸生、而未竟之業。將以俟後昆也」

(21) 「曾祖母卽世、叔父石蓮公、欲謀葬、會有阻之、久不得行志。…」

(22) 『明史』列傳九十に句容の王暉がいるが、別人であらう。

(23) 『清史稿』費密列傳(二八八)に名が見られるが、詳細不明。

(24) 徐士俊・汪淇編『尺牘新語』二集卷十六

(25) 卷八・排調に「王丹麓年踰四十、益復困頓。婦戲語曰、同學少年皆不賤、奈何夫子獨長貧。王曰、吳廬少詹有言、貧祖上天所設、以待學者之清俸。金陵吳介茲亦言、天以貧德人令處儔類之中、天幸德我、特頒清俸、義難獨享、願以共卿。婦晒曰、君意良厚、但不知何日俸滿耳」とあり、注に「婦姓鄒、文學公遠女、十六歸王。布裙操作、客至供饌惟謹。一日王欲留客、適無錢、

大爲局踏、入謀諸婦。婦故難之曰、身所有祇此髮耳、惟君所裁。王曰、卿未嘗倩筆畫眉、顧乃假手截髮耶。婦笑拔簪附之」とある。

(26) 前掲・周啓雋「文學瑞虹王公墓誌銘」による。

(27) 卷五・夙慧に「王丹麓座客常滿、有客謂孔子無鬚、眾詰其說、客曰、本孔叢子、子思告齊君曰、先君生無鬚眉、天下王侯不以此損其敬。故知今像多鬚誤也。時丹麓子鼎六歲、在側應聲曰、然則孔子亦無眉耶。客語塞」とあり、またその注に「鼎字用和、器度端重、聰慧性成、喜讀書、講習便能了了。行文亦時露新穎。八歲學吟詩有無情風雨過花落不成春之句、客有談及紅顏薄命者、則舉大學集注中天夭少好貌一語爲證、以爲天字讀作上聲、卽天義也。十二歲卽殤、識者謂其識云」とある。

(28) 卷五・夙慧に「王丹麓病起畏寒、每當雪夕閉戶謹風。時幼子小能五歲、坐著膝上曰、大人寒故畏風、抑知風亦畏寒。王問故、答曰、風不畏寒、何由喜撲人懷」とあり、注に「小能是丹麓第五子、資性聰敏、容貌端妍、孝事父母、迥異凡兒。四五歲時蒼頭負經市上、見者莫不嘖嘖稱羨、甚欲連手攀之」とある。また、卷六・傷逝に「王丹麓有三子、幼子小能最鍾愛。六歲蚤殤、王大哀慟。或爲太過、王曰、佳者不存、存者又不能佳、吾目未喪、方自愧不及情、君乃爲太過耶。言罷復益歎歎」とある。

(29) 『尺牘新語』二集卷十六

(30) 『清詩匯』卷五十による。

(31) ただし、『今世說』については、王暉と作品のやりとりのある人物だけを取り上げることとする。

(32) 各人物の調査については、正史や各個人集のほか、張慧劍『明清江蘇文人年表』（上海古籍出版社・二〇〇六年）、楊同甫編『明人室名別稱字號索引』（上海古籍出版社・二〇〇二年）、楊廷福・楊同甫編『清人室名別稱字號索引』增補本（上海古籍出版社・二〇〇一年）、周駿富編『明代傳記叢刊』（明文書局・一九九一年）、同編『清代傳記叢刊』（明文書局・一九八五年）、陳文新主編『中國文學編年史 明末清初卷』（湖南人民出版社・二〇〇六年九月）などを適宜参照した。

(33) 詳しくは謝明陽「清初西泠派詩學論析——以柴紹炳、毛先舒論詩書爲開展」（『成大中文學報』第二十五期・二〇〇九年七月）等参照。

(34) 前掲吳儀一「本傳」

(35) 「王暉の交遊關係中の僧侶」（『蓮花寺佛教研究所紀要』第九號・二〇一六年三月）

(36) 『霞學堂文集定本』の序文に「…乃王子所製霞學堂集久、已流布宇內、近復勸成定本、屬恬菴上人索序」とある。

(37) 「張潮の書簡に見られる『檀几叢書』の編集状況について」（『大東文化大學『漢學會誌』第五十五號・二〇一六年三月）